序言 / Foreword

国際日本文化研究センター(日文研)は、2010年10月5~7日にインドネシア大学において、第17回海外シンポジウム「日本の文化と社会の潮流」(Understanding Contemporary Japan)を同大学と共催した。本書はそのシンポジウムの報告書である。

シンポジウムの目的は、インドネシアで年々顕著に関心が深まっている日本研究の実態を踏まえ、両国の文化的な交流の歴史的過程と現状を把握することであった。インドネシアを含む東南アジアでの日本に対する関心は、初期の段階では日本語や日本の文化・文芸に集まっていた。その後、これらの研究を基礎にしながら、社会・経済・政治にも関心が広がり、近年はマンガ・アニメ・テレビドラマ・音楽などの日本の大衆文化が東南アジアの市民や研究者の注目を集めている。日本の固有文化とされている文化的現象に、東南アジアからの影響を解明する研究や、各国の近代化の過程で日本からの思想的・歴史的モデルがいかに水面下で取り入れられたかなど、欧米の理論的枠組みを批判的に読み替える研究もなされている。これらの研究の特徴は、グローバル・スタンダードとみなされてきた西洋のアカデミズムや思考法を打破し独自の視点と方法を導入していることにある。

シンポジウムでは、そのような研究現状を踏まえ、「経済・経営・国際関係」「開発政策と社会」「現代文化」「若手研究者と大学院生のセッション」「歴史・宗教・文学」の各セッションとふたつのラウンドテーブルが行われた。日本・インドネシア・タイ・オーストラリア・シンガポール・フィリピンから23件の研究発表と討議があった。聴講者はインドネシア大学の院生を中心に、実数で約200名にのぼった。ラウンドテーブルでは、東南アジア各国で日本研究がどのように推移しているのか、日本研究に日本語が必要かといった課題に多くの時間が生産的に費やされた。

いま求められているのは、欧米や日本の基準ばかりではなく、インドネシアを含む東南アジアの視点をも相対化し、互いの足場を再確認する機会を生むことであろう。そのような目論見を達成するためには、今後もインドネシアや他の東南アジアの国々と日本の研究者が顔を合わせ、議論をつづけることが必要である。本書がそのような潮流の一角を占めることができたら幸いである。

第17回海外シンポジウム実行委員長

山田 奨治